

「善巧摂化」とは、まず、自利を全うするの利他の謂である。

けだし、この「自利と利他」とは、一体の心の両面にして、自利あれば必ず利他あり、利他あれば必ず自利あり、時に自利のみを言うとも、自利利他の自利であり、時に利他のみを論ずるも、自利利他の利他である。自利利他、二利の中間に如何なる力を以てこれを割かんとするも、遂に、自利と利他とを分割することは不可能である。あたかも、自損損他、自害害彼が、遂に無明煩惱の両面に過ぎざるが如きと同一である。重ねていう、自利利他は、一如不二、一体にして、分かつべからず、しかも同ずべからず。之れ誠に盡未来際を徹しての真理、巖として動ぜざる法則なりとす。

「善巧摂化」とは、善巧とは自利を全うするの利他、即ち自利利他の利他をいうのである。摂化とは、一切衆生を教化すること、摂化することである。即ち、言いかえれば、実智(自利の智)に即する権智(方便智)を以て、能く衆生を化するを善巧摂化というのである。

この善巧摂化の言は天親論主の浄土論に於いては、「巧方便回向成就」と云われるものである。同一の世界を巧方便回向と云い、善巧摂化と云われるのは、浄土の菩薩は、衆生に方便回向することを以て、善巧に衆生を摂化するが故である。

## (二) 柔軟心の成就

「如是菩薩奢摩他・毘婆舍那広略修行成就柔軟心」この天親論主の語を釈して、曇鸞は、「柔軟心者謂広略止観相順修行成不二心也。譬如以水取影、清浄相資而成就也。」と云われる。

以上の文の意は、自利利他の利他、即ち還相の菩薩の善巧摂化は如何にして可能であるかを説かんとして、まず柔軟心の成就を示されるのである。

まず、「広略止観相順修行成不二心」とは、広略とは浄土の広略相入を謂う。

浄土の広相とは、三種莊嚴二十九種をさし、略相とは、一法句、一法句とは清浄句、清浄句とは、眞実智慧、無為法身のこと。この眞実智慧無為法身によって、浄土の広大なる莊嚴を生じ、広大なる莊嚴によって、清浄功德を出すのである。略相によって広相

あり、広相によって略相に入る。これを広略相入というのである。されば浄土は広略相入の境である。

「柔軟心とは、謂く広略の止観相順し修行して不二心を成ぜるなり。」

次に止観とは、止(奢摩他の訳)とは定であり、観(毘婆舍那の訳)とは止定によっておこる観慧である。即ち心を一境に止むるは止であり、それによって浄土の広略相入を觀ずるは觀である。されば、浄土の広略相入を觀ずるものは、觀である。しかし觀を成就するものは、心の波をとどむる止である。故に止観相依って、浄土の広略相入を知るのである。

かくの如く、止観互いに相資け相順して、広略相入する心を不二心というのである。止観は誠に不二心である。されば不二心は、広略相入し、止観相順して境智不二、能所融合泯亡する心であり、これを柔軟心というのである。

止観も亦然り、定慧相資けて彼の広略の如く、如実に知見し、柔軟に調和するを柔軟心というのである。

止観不二心は、誠に法の実相に契う心である。されば浄土は広略不二の境であり、止観は広略相入する心なるが故に、止観は浄土の心である。したがって柔軟心は浄土の心である。

「実相の如くして知るなり。広中の二十九句と、略中の一句と、実相に非ざることなきなり。」と説かれる。浄土の広相二十九種も、略相一句も、実相に非ざることなきが故に、その実相の如く知って浄土に違逆せざる心即ち柔軟心である。

実相とは「相即ち無相」なるを名けて実相という。広略相入に達すれば、即ち実相の如く知ると云われる。三種莊嚴の実相は、法性であって、相好莊嚴即ち法身であるが故に、広も単広に非ず、略も亦単略に非ず、故に「莫レシ非ニルコト実相一」という。しかし実相という限り、広より略に入り、相より無相に達するにあり、これは特に般若実相の智に約しているのである。浄土の莊嚴二十九相に入って、いよいよ無相を知る、これ実相の如く知るのである。そこに柔軟心が成就する。

「柔軟心とは、謂く広略の止観相順し修行して不二心を成ずるなり。」

かく浄土の広略相入の徳を止観不二心によって得るもの即ち、菩薩の柔軟心である。

されば柔軟心こそは、浄土の広略相入の徳によってのみ得る所の心である。柔軟心は智慧である。広略の諸法を照見する般若の智慧である。これなくして自利利他することは不可能である。

柔軟心こそは、浄土の実相を知る心である。浄土の実相の徳によって成就する心である。しかして、そもそも柔軟心が問題にされたのは、善巧攝化の問題においてである。巧方便回向を成就せんとすれば、まず柔軟心を成就しなければならない。

如実に広略の諸法を知ること、即ち柔軟心を成就することとなるが故に、柔軟心こそは、巧方便回向の心である。即ち「**実相を知る**を以ての故に即ち三界衆生の虚妄の相を知る。衆生の虚妄を知れば、即ち**真実の慈悲を生ずるなり。**」**真実の智慧は慈悲となる。**柔軟心は浄土を縁するよりおこる心ではあっても、柔軟心と云われる限り、現実生死界にはたらく菩薩の心である。であるが故に柔軟心こそは巧方便回向の心である。

**衆生の虚妄を知るが故に即ち大慈悲を生ずるのである。**ここに真実の慈悲とは、無縁の大悲をいうのである。

**衆生の虚妄を知れば、大慈悲を生ずるのは、菩薩の心が柔軟心なるが為である。**蓋し浄土より還相せる柔軟心の菩薩ならざれば、衆生の虚妄に対して大慈悲を起こすことは出来ないであろう。即ち衆生は衆生の虚妄に対しては、大慈悲を起し得ないで、瞋恚、憎悪の心を生ずるものである。**浄土の実相を背景として、真実智慧を成就せる、還相柔軟心の人のみ、衆生の虚妄に対して、唯大慈悲を起こすのである。**かく衆生の違逆虚妄に対して、瞋憎を超えて大慈悲を起し得るのは、菩薩が浄土の実相を念ずるが故である。されば続いて、

「**知真実法身則起真実帰依也。**」と説かれる所以である。

実相は真実の法身である。即ち法に約すれば実相と云い、人に約すれば法身という。されば**実相を知る**とは、**真実の法身を知る**ことである。**実相法身を知るが故に究竟の帰依を起こすのである。**これ即ち上求菩提心である。如来法身に帰依することは、限りなく智慧によって、自利満足せんとするのである。即ち願作仏心である。

**慈悲はこれ利他度衆生心、帰依は自利の願作仏心、この帰依と慈悲とこそ自利を全うじて利他を成ずる処の巧方便である。是れ則ち、巧方便回向を成就するのである。**

菩薩は生死界に現行しつつも、常に彼岸に超越し、しかも衆生の虚妄に対しては随順して大慈悲を起こすのである。しかして**この帰依と慈悲とは柔軟心の二相である。**即ち柔軟心の超越性は帰依によって生まれ、柔軟心の随順性は慈悲によって生まれる。**この帰依と慈悲とを全うじて不離なる菩薩の柔軟心の具体的大用を巧方便というのである。**

憶うに、衆生に対する善巧摂化を説かんとせられるに当たって、まず柔軟心の成就を問題とせられた所以も、ここに於いて明かとなるのである。

自利成就せずして、どうして利他成就があろう。自利によって利他を成就し、利他を全うじて自利は完成する。自利利他一如の世界なるが故に、まず菩薩は、浄土の実相法身に帰依して、自利成就して、柔軟心をおこし、備に衆生の虚妄相を知ることによって、大慈悲をおこし利他方便の世界に出でんとするのである。

もし菩薩が智慧による真実の自利成就なくして、衆生の為にするならば、それは凡夫の顛倒に墮し、もし法性を証すといえども、利他大悲の動を持たぬならば、二乗と云われる。ここに於いて、菩薩の世界は「如是成就巧方便回向」と言われるのである。如是成就とは、帰依と慈悲とによる願作仏心と度衆生心、即ち巧方便回向の心である。

其の五念門に集る一切功德善根に於て、三つの願あることを示される。即ち、

(一) 自身住持の樂を求めず、

(二) 一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に、

(三) 作願して一切衆生を摂化して共に同じく彼の安樂仏国に生ぜしむ、

と云われるのがそれである。これは後に至って、障菩提門に於いて、智慧門、慈悲門、方便門に配されるものであって、仏道を成就して、本仏の願意を顕現せんとする菩薩の具体的な生活の意義である。

菩薩は、五念行を如実に修行することによって、真如一実の功德宝海を獲得する。しかし、その得たる福德は、決して「自身住持の樂を求め」る為にはしない。自身の樂の為にしなければ一切衆生の為にするのである。即ち自然に第二の願「一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に」が出て来るのである。ここに於いて菩薩の大慈悲の心が示されたのである。しかしながら具体的には菩薩は五念行を修して、彼岸へ願生するものである。その願生道に於いて「作願して一切衆生を攝取して共に同じく彼の安樂仏国に生ぜしむ。」と、利他を成就せんとするのである。しかして論主は、これを以て菩薩の巧方便回向の成就とせられるのである。

以上三つの願に於いて、(一)(二)は共に、衆生に対する慈悲であり、(三)は菩薩の帰依を示されたものである。帰依と慈悲とは、柔軟心の両面として説かれたものであった。菩薩は帰依によって自利成就し、慈悲によって利他成就すと。自利利他一如の境こそ、柔軟心そのものであった。

しかし自利と利他とは、徹頭徹尾相即一体のものであって、自利を休止して、後利他するのでもなく、利他を廃して自利するのでもない。真実の利他は必ず不断の自利によって発り、真実の自利は利他によって完成するのであった。であるからこの三願に

於いても、慈悲には帰依が裏付けられてあり、帰依には慈悲が裏付けられてある。

法身への帰依、即ち智慧を成就しないでは、「自身住持の樂を求めず」との意は発し得ないし、自利成就しきらない者が、「一切衆生の苦を抜く」ことは出来ない。それは自ら水に溺れつゝ、人を救わんとする愚に墮するが故である。「作願して……彼の安樂仏国に往生する」ということは、正しく帰依によって自利成就せんとするのではあるが、しかしその願心には「一切衆生を攝取して共に同じく」という利他の慈悲が孕まれてある。

さればこの三願こそは、帰依と慈悲とをその内容とする柔軟心の現行に外ならない。

裏がえして云えば、柔軟心は、この三願を具足することによって、眞実となるのである。

故に「是を菩薩の巧方便回向成就と名く。」と云われるのである。誠に巧方便回向とは、已上の文によって、還相の菩薩の具体的生活内容たることが知られるのである。

鸞師は巧方便回向を説くに当たって、まず大經を挙げられた。即ち大經下巻の初には、至心に彼国に願生する衆生の上中下の三輩あることを示し、三輩によって行に優劣はあれども、三輩ともに、「無上菩提心を発し、一向に専ら無量寿仏を念ずる」ことが示されてある。

鸞師は今、還相の菩薩の巧方便回向成就の問題を説かんとするに当って、何故に、往相の行者の世界を示し、一切願生の行者が悉く無上菩提心を発すことを示す文を引用せられるのであろうか。これ願生の行者も亦、二利成就することを積成せんとせられるのである。

言い換えれば善巧攝化已下は全て、弘願信心の徳義であって、唯これ建章の「一心」なることを示されるのである。無上菩提心とは、願生の行者の一心に外ならない。しかして一心をおいては遂に、如何なる徳も菩薩の上には顕現しないのである。

願生の行者の信心は、その体徳としてこの二心を具足するのである。もとより行者生得の機は下品の劣機である。巧方便回向を起こすというともその行相として起こすのではなく、体徳として、無疑の一心中に自ら其の徳を内具するのである。

即ち我等は先に、菩薩の柔軟心について、柔軟心の三つの相であるところの帰依と慈悲において、帰依は願作仏心であり、慈悲は度衆生心であり、しかして「衆生を攝取して有仏の国土に生ぜしむる心」は巧方便であることを知った。しかるに今はこの三心を、往相の行者の菩提心の内容として示されたのである。

然れば、利他方便回向成就せんとする菩薩と、願生の行者とは全く同一なるものなのであろうか。其の差異はないのであろう

か。

憶うに

還相の菩薩は、利他成就せんとするものであり、

往相の行者は自利成就せんとするものであって、

前者は浄土の大涅槃の証によってやがて光より暗に大悲の手をさしのべんとするのであり、

後者は、暗を後に光の国に衆生と共に旅立んとするのである。

であるから二者は全く同一ではないと云われるべきである。しかるに何故に此处では同一の願作仏心、度衆生心等の意をその内容として説かれるのであろうか。

しかるに我等は、今、「無上菩提心は即ち是れ願作仏心なり。願作仏心は即ち是れ度衆生心なり。」と説かれるのを見る。

即是とは、同体異名たることを示されたものである。即ち願作仏心が自利利他の自利であるならば、度衆生心は自利利他の利他である。しかも自利利他の二利は遂に何物を以ても分かつべからざる一心の両面である。故に願作仏心の自利なき度衆生心は眞実の度衆生心でないと共に、度衆生心の利他を持たざる願作仏心も眞実の願作仏心ではあり得ない。

願生の行者は、自ら助からんとする願作仏心の人であるが故に、その一心の願生心には、度衆生心を内具するのであり、還相の人は巧方便回向成就して利他を完成せんとする人である。その利他度衆生心は、そのまま自らそれを通して、願作仏の心を満足せんとするのである。願作仏心なくして衆生を救うということは、自らは溺れつつ他を救わんとする凡夫顛倒の愚であるし、他を救わんとする意を具せずして自らのみ救われんとするは二乗の利己心である。ここに往還二相の相違を知ることが出来るのである。

次に、我等は、論の巧方便回向成就を説ける文も、其の帰結に於いては、

「作願して一切衆生を攝取して共に安樂仏国に生ぜしむ。」

と示され、又、願生の行者の菩提心、ひいては願作仏心、度衆生心釈に於いても、

「願作仏心とは即是れ度衆生心、度衆生心とは即ち、衆生を攝取して有仏の国土に生ぜしむる心なり。」

と結ばれたことについて、深く考えざるを得ないものである。願生の行者はもちろん、有仏の国土即ち彼の弥陀の安樂淨土に往生するより外に白道のないことはもちろんであるが、還相の菩薩の巧方便回向成就の世界も具体的には、一切衆生を攝取して共に彼の安樂仏國に生れんと作願するより外に道のないことを示されたのである。自ら生ずる限り、願作仏心であり、衆生を攝取する限り、度衆生心と云われるのである。

ここに於いて、願生の行者といえども、自力煩惱の心を離れて、如来回向の眞實信心即ち菩提心によるが故に、その願作仏心の念々の歩みは、知らずして一切衆生を念仏道に攝取しつつ往相の一道に自利成就せしめられ、還相の菩薩も亦、衆生を攝取して願生の一道を生きるという、往還歸一の世界を知ることが出来るのである。

我等は、世尊、七祖、聖人等の上に、還相の相を拝するに、それらの諸聖一人として、自らは還相意識を持たず、全く一心の願生の行者として生きられたるその眞意をも亦知ることが出来るのである。自ら還相意識を持つが如きは、その願生道に不純を混ざるものである。一切は一心願生道において光ること知るべきである。

眞實の信心、即ち一心は、無上菩提心である。であるが故に、眞實の願生者には、必ず菩提心を要とする。しかして無上菩提心とは、既に述ぶるが如く、願作仏心即度衆生心、即ち自利利他一如の心であるとは、鸞師の説であり、又我が聖人の一貫せる説である。

先に我等は、淨土の心とは柔軟心であることを知らしめられた。しかるに今は又、無上菩提心と云われる。ここに於いて、柔軟心とは菩提心であることが明らかとなる。柔軟心とは無上菩提心の本質である。

前に説かれたが如く、柔軟心は、智慧によって法身に歸依し、慈悲によって衆生の苦悩に同感し随順する心であった。しかるに、智慧によって法身に歸依するとは、願作仏心であり、大悲によって衆生の業苦に同感し、衆生の全的運命を自ら荷負することは、度衆生心である。

智慧に依るが故に自身住持の樂を求めず、慈悲に依るが故に、一切衆生の苦を抜かんと欲するは、柔軟心である。今、鸞師はかかる淨土の心を無上菩提心の上に見ようとせられるのである。

この自利利他一如の誓願は、本仏の誓願である。本仏の誓願なるが故に、還相の菩薩の上に現れるのである。還相の菩薩は

如来の願として生死界に生きる人である。

我等は念仏して往相位に立ちつつ、この還相の意を聞いて深い内観にさそわれるものである。しかして往相位の無上菩提心を提出して、その上に体徳として二利成就を見んとせられる鸞師の意に限りなき感銘を受けるものである。

因清浄に非ずして如何にして果清浄を得ることが出来よう。行者の無上菩提心と云い、菩薩の柔軟心と云い、共に如来本願の回向表現である。

「譬えば、火燵一切の草木を摘んで焼いて盡さしめんと欲するに、草木未だ盡きざるに火燵已に盡きんが如し。」

木にて造れる火箸(火燵)を以て草木を焼きつくさんとするに、草木を盡さざる先に火箸そのものが焼きつくされたが如きものであると云われるのである。

この譬を法に合すれば、火燵とは菩薩であり、草木とは衆生であり、焼とは利他であり、先盡とは自利である。

真実の利他は、自然に自利を成就することを示されたのである。一切衆生を利他せんとする大慈悲は、一切衆生よりもさきに、まず菩薩そのものを救うのである、一切を焼かんとする火は、他を焼くより先に自らを焼くのである。専ら利他を行ずれば、任運に自利を成ずる。これ全く順菩提門の行なるが故である。この随順菩提の利他を巧方便と名づくるのである。

凡夫は利他を以て損失と考える。利他を以て自損となし、横に利他ならざる自利を得んとするが故に、却って自損の世界に墮落するのである。真実の利他は決して自損ではない。

真実の利他こそ、よく自利を成就する。自利利他の利他のみよく自利を成就する。これを巧方便と名づけられるのである。

利他にしても自損をまねくならば、決して巧という文字は用いられない。利他が自利を成就すればこそ、利他を巧方便と云われるのである。

利他が自利を成就するのは、巧方便よく菩提に順するが故である。身を後にして而も身先ずるを得るのは順菩提の行なるが故である。これ全く菩薩の巧方便回向である。

菩薩は自利によって利他する。而も、自利は唯無限の利他、永遠の利他によってのみ成就する、この自利利他の利他を巧方便回向といわれるのである。